

【七夕百合物語】

2022 エトワール



トラック1「3年ぶりだね！」

アルタイル

「……ベガ！ ベガ～～！！！」

ベガ

「きやつ！

もう……アルったら、相変わらずなんだから」

アルタイル

「えへへ、ごめんね。

でもさ、3年も会えなかつたんだよ？」

ベガ

「……そうですね。

ただでさえ、年に一度しか会えないというのに……」

アルタイル

「そうそう。ここ数年、七夕の日は天気が悪かったからさ。

……わ。この部屋も埃たまってる」

ベガ

「誰かさんがはしゃいだら、大変なことになってしまいますね」

アルタイル

「え～？ 誰かさんってだれだれ？」

ベガ

「もう……本当、可愛いんだから」

アルタイル

「ふふふ、なんか言った？」

ベガ

「な、なんでもありません。

……それよりも、話したいことがあるの」

アルタイル

「え？

……あ、分かった。掃除の分担でしょ」

ベガ

「……おバカ。

そんなことより、もっと大事な話です」

ベガ

「あなたとの関係を、大きく変えてしまうような……

そんな、とても大事なお話」

アルタイル

「……あっ！

ま、待った、ストップストップっ」

ベガ

「え？」

アルタイル

「そこから先は、言わないでっ

ボクからも、言いたいことがあるのっ」

ベガ

「……っ」

アルタイル

「え、えっと……あの、その……！」

この3年、会えない時間がずっと続いて……それで改めて思ったんだけど……」

アルタイル

「……うわー、やっぱり、改めて言うの恥ずかしいな……

で、でも、今日こそ勇気を出して言うよっ！」

アルタイル

「キミが好きだ、ベガ！ ボクと一緒にになってほしい」

ベガ

「……ふふ。

先に言われてしましましたね」

アルタイル

「えへへ、どうしてもベガより先に言いたくて」

ベガ

「わたしも……あなたに負けないくらい、

あなたが好き」

アルタイル

「えー？ ボクのほうが大好きな自信、あるけどなっ」

ベガ

「ふふ、そうかしら？」

ベガ

「……ちゅ」

アルタイル

「……ひやつ！
キ、キ……キス、されちゃった……！」

ベガ
「こんなものじゃありませんよ。
3年間、ずっとガマンしてたんだから」

(同時)
ベガ
「ちゅ……ん、ちゅう……」
アルタイル
「んう……ちゅ……う……」

ベガ
「どう？ 伝わったかしら」

アルタイル
「はあ……はあ……もう、すっごく伝わったけど……
うう～……！ ボクだって負けないぞっ」

ベガ
「ひやつ……
あなた、力……強いのね……」

アルタイル
「えへへ、絶対離さないっ」

アルタイル
「ずっと……こうして、ベガの身体……ぎゅーって抱きしめたかったんだもん。
やっと独り占めできた……ふふ……」

アルタイル
「……ちょっと、エッチな体つきになった？」

ベガ
「こ、こら……！」

アルタイル
「ごめん、言い方悪かったねっ。
おっぱい……前より大きくなった気がして。やわらかい」

ベガ
「もう……エッチなのはどちらですか。
……その、可愛く見られる努力はしてるつもりですけど」

アルタイル
「えへ……えへへ、そつか……」

アルタイル
「ねえベガっ、舌、あーんって出してみて？」

ベガ
「へ？ い、今ですか？」

アルタイル
「いいからいいからっ」

ベガ
「もう……むう……」

ベガ
「べー……こうれふ、か？」

アルタイル
「うんうん、そのままそのまま……」

アルタイル
「はむ……ん、ちゅう……ちゅる……れろ……」

ベガ
「んう……うつ……あ……そんな、舌、しゃぶるなんへ……んんっ」

アルタイル
「ちゅる……ちゅぱ……はむ、れろ、れろお……」

ベガ
「ん……ふつ、う……んあつ……ふ、うう……」

アルタイル
「ちゅうう……んちゅ……ふは……
えへへ、どう？ さっきの倍返しつ」

ベガ
「んう……あなたばかり、ズルいです……
わたしにも……させてください……」

アルタイル
「もちろんだよっ
今度は、一緒に……」

ベガ
「はむ……ちゅうう……んちゅ、ちゅるる……」

アルタイル
「んうつ……ちゅつ……ちゅうう……舌、からめるの……

すっごいきもひいね……ちゅう……ちゅぱ、んちゅう……」

ベガ

「ちゅう……ちゅぱ……ええ、ほんとう……あたまのおくが……
しひれて……んんつ、ちゅう……ちゅぱ……んつ……」

アルタイル

「ふは……ねえ……次はベガの唾液、ちょうどい……
キミの全部、ほしいよ……」

ベガ

「あ……え……少し……その、はしたなくありませんか……？」

アルタイル

「そんなことないよつ。
好き同士なら、普通だよ……」

ベガ

「……そうですね、ごめんなさい。
少し……照れちゃいました」

ベガ

「いきますよ……ん、ちゅ……べー……」

アルタイル

「ん……う……ちゅる……こく……こく……んんつ。
ベガの、おいしいよ……」

アルタイル

「今度は……ボクのも、お返しするね……」

アルタイル

「はむ……ちゅ……べー……べー……」

ベガ

「んう……ん……こく……こく……ふ、んんつ……」

アルタイル

「ふはっ……はあ……はあ……
わ、唾液が糸引いて……なんか、エロいね……」

ベガ

「はあ……はあ……夢、みたいです……
あなたと、こんな風に……唇を重ねてるなんて……」

アルタイル

「もっと早く、こうしてればよかったね」

ベガ

「ええ……正直、その……」

アルタイル

「分かるよ。すっごくすっごく、気持ちいい」

ベガ

「ずっと、してみたいのです……」

アルタイル

「ねえ……このあと、どうする？」

アルタイル

「いつもなら、真っ先にお部屋のお掃除して……
一緒にご飯食べたり、遊んだり、してたけど……」

ベガ

「無理、ですよね」

アルタイル

「うん、無理」

ベガ

「ベッド……行きましょうか」

アルタイル

「うん……」

ベガ

「えへへ」

アルタイル

「ふふ」

アルタイル

「いっぱい、愛し合お？」

ベガ

「たくさん、愛し合いましょう？」

トラック2「熱い想いを君に…」

アルタイル

「……わ、この部屋も久しぶりだねっ」

ベガ

「……毎年、一緒のベッドに入って、
夜更けまでお話するのが、ひそかな楽しみでした」

アルタイル

「ボクもボクもっ」

アルタイル

「……でもさ、お互いよく我慢できたよね」

ベガ

「……あの、今だから言えるんですけど。
寝息を立ててる時に何度も……キス、してしまいました」

アルタイル

「え！？ ボクもだよっ！？」

ベガ

「え……！？ ふ……ふ、ふふ……ふふふふ……」

アルタイル

「あははははっ、それでお互い、
あんまり初めて一とか驚かなかったんだっ」

ベガ

「似た者同士というか……考えることは同じみたいですね」

アルタイル

「じゃあこれも分かるよね……えいっ」

ベガ

「きやっ、いきなり押し倒さないでください……」

アルタイル

「でもでも、早くしたいよねっ？」

ベガ

「……ふふ、せっかちさんなんだから」

アルタイル

「今まで我慢してた分の埋め合わせしないとだもんっ」

ベガ
「ええ、ですね」

アルタイル
「お耳、なめてもいいかなっ」

ベガ
「へ！？ ほ、ほんとに
どこでそういうの覚えてきたんですか……」

アルタイル
「えへへー、内緒」

アルタイル
「それに……前から、
すっごいキレイだなーって思ってたんだよねっ」

ベガ
「褒めれば何してもいいと思ってません？」

アルタイル
「え、えへへ……バレた？」

ベガ
「ふふ……いいですよ」

アルタイル
「やった……じゃあ……左耳、貸して……？」

アルタイル
「ん……ちゅ……れろ……んちゅう……んちゅう……んちゅう……ちゅう……」

ベガ
「ん……う……は、あ……くすぐ、つたいです……」

アルタイル
「んちゅ、んちゅう、んちゅう、ちゅう、ちゅう、ちゅうう……は、あ…」

ベガ
「ひあ……あ……もうちょっと、手加減を……んんんっ」

アルタイル
「ん……んちゅう……んちゅう、ちゅう、ちゅう、
んちゅう、れろ、ちゅう、んちゅう……」

ベガ
「あ……ま、待って……本当に、これ……へ、へんですっ……お耳の中……あなたの舌が這いず
り回って……う……あつ、んんっ……」

アルタイル

「ふは……えへへ、ベガ、すっごい可愛い。
もっと頑張っちゃお」

アルタイル

「んちゅるる、んちゅる、んちゅる、ちゅう、ちゅう、れろ、んちゅう、んちゅう」

ベガ

「ふう……んつ、ふう一つ、ふう一……つ！！」

アルタイル

「声……ガマンしなくていいよつ……ちゅう、んちゅう、んちゅう、んちゅる、
んちゅる、んちゅる、んちゅる、れろ、れろ、れろ、れろ……」

ベガ

「そんなこと、言われても……ふ……う……ああつ」

アルタイル

「ふは……
わ、ベガの耳、ベトベトになっちゃった……拭くものあるかな」

ベガ

「はあ……はあ……ちょ、ちょっと……
やり逃げは……反則だと、思いますけど？」

アルタイル

「あ……えっと、あはは……きやつ」

ベガ

「お返しに……あなたの右耳、徹底的にイジめてあげます」

ベガ

「んちゅう、んちゅう、れろ、ちゅふふつ、んちゅるつ、ちゅふつ、ちゅるつ、ちゅるつ」

アルタイル

「うひやつ……あ……う……はあつ……いきなり、本気だねつ……ふ、んんつ」

ベガ

「ちゅるつ、んちゅるつ、んちゅるつ、んちゅるつ、れろ、れろ、れろお……」

アルタイル

「えへへ……ベガが、ボクのために、エッチなことしてくれてる……
うれしいよお……はああつ……あつ」

ベガ

「ふは……もう、これじゃお返しにならないじゃないですか……
はむ……ちゅううう……るるる……ちゅぱ……じゅる…つ、んちゅるつ……」

アルタイル

「だって、気持ちいいんだもんっ……んんんっ、んっ……
もっと……もっとして、いいよっ……」

ベガ

「なら……こうしゃいます。ふー……ふー……」

アルタイル

「あうんっ……あ、は……ふーふー、ダメえ……」

ベガ

「それから……うなじに……ん……ちゅ、ちゅうう……」

アルタイル

「んっ、んんんんっ……」

ベガ

「ふふ……キスマーク、つけちゃいました」

アルタイル

「あ……ズルいズルい、ボクもっ」

アルタイル

「ん……ちゅ……ちゅうう……」

ベガ

「は……あ……んんっ……」

アルタイル

「帰つたら……皆、ビックリしちゃうかな」

ベガ

「今はそんなこと、考えなくていいですよ……」

アルタイル

「うん……ボク、ベガにもっと触ってたい……」

ベガ

「はあ……あっ、いきなり……胸、ですか……んんっ、
触り方、ねちっこいですね……」

アルタイル

「だって……エロいんだもんっ」

ベガ

「なら……こちらもですわ」

アルタイル

「ひやんつ……あ……はああ……」

ベガ

「あ……んんつ……う……そこ、だめ……
敏感……だから……んんつ……ふ、んう……」

アルタイル

「はあ……はあ……えへへ、乳首……見つけちゃった……
布越しでも……硬くなってるの、分かるよ……」

ベガ

「はああ……あ、んんつ……ねえ、待って……」

アルタイル

「ご、ごめん……やりすぎたかい……？」

ベガ

「ち、ちがうの……触るなら……
ちょくせつ……じゃないと……切なくて……」

アルタイル

「……っ！」

ベガ

「ひやつ……破かなくても……」

アルタイル

「ちょっと今、そういう冷静な判断、無理かも……」

ベガ

「はうつ……あ……んんんつ……や、つまんだりしたら……伸びちゃう……」

アルタイル

「ごめんね、でもベガも悪いよつ。
すっごいすっごい……えっちだから……」

ベガ

「あ……うつ……ふ……あつ……
嬉しいこと、言わないで……何も、考えられなくなっちゃいます……」

アルタイル

「ボクもだよ……ベガの全部に触れていたい……」

ベガ

「ふあ……！ あ……やつ、あ、あそこ……だ、だめです……」

アルタイル

「なんで？ 好き同士なら、触りあうものだよ？」

ベガ

「だって……今、その、濡れてますし……」

アルタイル

「大丈夫だよ……ほら、ボクのも触って」

ベガ

「あ……下着越しでも、分かります……

アルも……興奮してくれてたんですね？」

アルタイル

「ね……動かして、いいよね？」

ベガ

「あ……はあんつ、まだ……いいって……言ってませんよお……」

アルタイル

「んう……でも、ベガも指、動いてる……ふう、んつ……」

ベガ

「でも……あなたみたいに、入り口、なぞったりして……あ……う……

焦らすようなことは……はあつ……あ……んんつ…」

アルタイル

「ベガの、可愛い顔、見たくなっちゃって……ふう、んんつ……

それに、ほら……くちゅくちゅって、音、聞こえてるよ」

ベガ

「はうう……う、それ、はあ……

アルが……だから……独りじゃ、こんなになりませんよ……」

アルタイル

「はあ……あ、ベガも、そういうの……あるんだっ……」

ベガ

「そう、ですうつ……好きな人に……おまんこ、触られるの……

気持ちよくて、きゅんきゅん……しちゃいますうつ……」

アルタイル

「なら、さ……触ってほしいとこ……

ボクのおまんこに、教えて……？ そしたら、そこ、触るから……」

ベガ

「もう、変なことばっかり思いつくんだから……ふう、んんつ……」

アルタイル

「ほら、さっきからボクに腰、押し付けてきてる……
つらいんだよね……？ 正直になっちゃお……？」

ベガ

「うう……わかり、ました……わ、わたしは……
入口のとこ、より……先端の……おまめのところを……こんな、風に……んっ」

アルタイル

「あううつ……ベガも、クリ……好きなんだ……
触り方、優しいけど……えっちい……じゃあ、いっぱい触るね……」

ベガ

「はああ……あ、あんっ……んんっ……悪い、ですかあ……
……会えないときは……いつも、こんな風に……お豆を、触りながら……」

ベガ

「あなたに……シてもらう、想像をしてるんですけどうつ……
はああ……あ、あうつ……んんっ……」

アルタイル

「嬉しい……ボクも、だよ……ほんとに、夢みたい……
ベガが……ボクの指で……可愛く鳴いてる……これ、全部ボクのものなんだね……」

ベガ

「そう、ですよおつ……あなたの指も、おまんこ、興奮して、赤く染まった……
かわいらしいお顔も、全部……わたしのものなんですっ……」

アルタイル

「はああ……ボク、もうガマンできないかも……」

ベガ

「あ……や、下着、ずらしちゃ——」

ベガ

「ふう、んんんっ……ああつ、そんな、お口つけたら……
汚い、ですよおつ……ふうう、んんっ……」

アルタイル

「ベガに汚いとこなんて、ないよ……それに、つるつるで……
薄ピンクで、すっこいキレイ……はむ、ちゅ……じゅううう……」

ベガ

「あはああつ、ん……う、あ……すご、い……舌が……
別の生き物みたいに、うねって……は……ああ、んんっ……」

ベガ

「負けて、られませんね……わたし、だって……
アルの身体なら……どんなところも……愛せる自信が、ありますから……」

ベガ

「んじゅ……ちゅ……じゅうう……」

アルタイル

「うひやつ、あつ……わ、お汁、すっちやダメだよおつ……ふう、んつ、
ボクが、攻めてるのに……んんんつ、あ……んうう……」

ベガ

「ダメ、ですうつ……ずっと、一緒って、大好きって誓ったんですから……
気持ちよくなるのも、一緒ですわ……」

アルタイル

「はああつ、あつ……んつ、う、嬉しいよおつ……
ベガはもっと……恥ずかしがって、してくれないと思ってたつ……」

ベガ

「あなただから、するんですつ……本当は恥ずかしいけど……
それ以上に、大好きで、大好きだから……」

ベガ

「ちゅうう……んちゅ、ちゅうう……れろ、れろ……」

アルタイル

「うあ、ああつ……クリの皮、剥けちゃうよつ……ひあつ、
あ……直接、舐められるの……ヤバい、かも……う、あああつ……」

アルタイル

「はむ……んじゅ……じゅうう……れろ、れろお……」

ベガ

「きやうつ……あ、舌が……あそこ……おまんこの、なかに……
ひうつ、あ、あ……えっちな音、たくさん、しちゃって……はあつ……」

アルタイル

「おいひいよお……ベガの、おまんこ……
ずっと……なめてたい……あうつ、あ、だめ……でも、なんか……」

ベガ

「わた、しも……さっきから……腰が、ふるえて……
はあ……キテ、しまいそうですつ……ん、ううつ……」

アルタイル

「いつしょに……いつしょに、イコつ?
はむ、んじゅう……じゅるるるつ……んじゅ、じゅううつ……」

ベガ

「はい……おまんこ……ペロペロ、しあいながら……
イ、イきますうつ……アルと、いつしょにいつ……んじゅ、じゅううう……」

アルタイル

「ん、ふ、ううう……
いく……いふ……いっひやう……んんつ……ちゅぱ、じゅうう……」

アルタイル

「じゅつ、じゅつ、んじゅるるる……じゅるつ、じゅううるるるつ、はあ……」

ベガ

「わらひも……も、もう……ふ、んんつ……
んちゅ、ちゅうううう……ちゅるるるる……」

ベガ

「ちゅつ、んちゅ……ちゅう、ちゅつ、ちゅう……ちゅるる…ゆいうううう……」

アルタイル

「あ……ああつ、ああああああ……！」

ベガ

「ん……んんつ、はううううう……！」

アルタイル

「はあああ……はあ……はあ……ふ、んつ……」

ベガ

「あ……ああ……はあ……はあ……」

アルタイル

「……イカされ、ちゃった……」

ベガ

「わたしも……
こんな……気持ちいいの、初めてです……」

アルタイル

「なんか……一気に、踏み越えちゃったね」

ベガ

「あなたとなら……どこまで行ってもいいって、思ってましたから」

アルタイル

「……えへへ、そつか。なら安心だ」

ベガ

「……またエッチな事考えてます？」

アルタイル
「あれ？ なんでわかったの？」

ベガ
「何年の付き合いだと思ってるんですか」

アルタイル
「恋人としては……まだ一日も経っていないね」

ベガ
「こいび……ん……はう……
改めて言われると、照れますね……」

アルタイル
「彼女で、恋人で……ボクのお嫁さんで……
宇宙一大好きな人だよっ」

ベガ
「……っ！
わたしも、ですけど……」

ベガ
「そういうとこ、ズルいです……」

ベガ
「……そ、そうだ。お風呂。入っちゃいましょう？
汗、かきましたし……ね？」

アルタイル
「えへへへ。は～いつ」

トラック3「もう離れたくないから……」

アルタイル

「よーし、いっちゃん風呂はいただいちやうよっ！」

ベガ

「ふふ、まずは身体をきちんと洗ってからでしょ？」

アルタイル

「えへへ、ごめんごめん。
こここの風呂大きいからさ。ついテンション上がっちゃって」

ベガ

「そういうところは全然変わっていませんね」

アルタイル

「ベガもだよ？ そういう大人っぽいとこ……愛してるつ」

ベガ

「もう、無邪気なんだか大人なんだか……」

ベガ

「……ほら、座って？ シャワーしてあげる」

アルタイル

「やったつ。ベガに洗ってもらうの好きなんだつ」

ベガ

「ふふふ。

……お湯、出しますよ」

ベガ

「湯加減はいかが？ 熱くないかしら？」

アルタイル

「うん……ぜーんぜんへいきー……」

ベガ

「あらあら、すっかり脱力ですね。

じゃあ、まずはシャンプーから……」

ベガ

「痛かったりしたら、ちゃんと言うのよ？」

アルタイル

「はーい」

ベガ

「ごし……ごし……ごし、ごし……」

アルタイル

「ふふ……えへへ……ねえ、ベガ気づいてる？
いつもシャンプーするとき、ごしごしつて言うの」

ベガ

「……へ、変ですか？」

アルタイル

「ううん、可愛いなーって」

ベガ

「もう、文句ばかり言う子にはこうしゃいますよ」

アルタイル

「きやつ……頭、ぐりぐりしゃぢゃダメ～……あうう～……
マッサージみたいで、きもち～……」

ベガ

「ふふ、単純なんですから……んあつ」

アルタイル

「あ、ごめ……！
肘……お、おっぱいに当たっちゃった……」

ベガ

「……い、いえ。わたしこそ、変な声出ちゃいました……」

(同時)

ベガ

「……つ」

アルタイル

「……つ」

アルタイル

「…………あ、あのさ。
えへへ、ムラムラしてきたかも」

ベガ

「も、もう……男の子みたいなこと、
言わないでください……」

アルタイル

「えー……だって、今のはズルいよっ。
ねーね、選手交代、今度はボクに洗わせて？」

ベガ

「……今度は何を企んでるんですか？」

アルタイル

「んふふ……きっと喜んでくれると思うなっ」

アルタイル

「えーっと、ボディソープは……これかっ」

アルタイル

「泡立て……ごし、ごしっと」

ベガ

「もう、マネっ子して……」

アルタイル

「えへへ、じゃーん。
全身泡まみれのボク、誕生～」

ベガ

「ちょっと、どうするつもりです？」

アルタイル

「このままボクが、スポンジになって……
ベガのこと、洗っちゃうよっ」

ベガ

「へ……？」

アルタイル

「じゃあ、まずは……背中からっ」

ベガ

「ひやつ……お、おっぱい……当たってますけど？」

アルタイル

「おっぱいスポンジってことでよろしくっ。
いくよー……んしょ……ん、しょ……」

(おっぱいスポンジで擦る音(泡を捏ねるみたいな柔らかめの音))

ベガ

「は……う……んんっ……背中に、やわらかいのが……
行ったり、来たりして……ん……変な、感じですね……」

アルタイル

「ん……う……ボクも……乳首、こすれて……
ちょっと……気持ちいい、かも……ふ、んんっ……」

ベガ

「もう……洗うのが、目的じゃなくて……？」

アルタイル

「えへへ……ん、しょ……ん、しょ……
はあ……ベガのお肌って、すべすべで、キレイだね……」

アルタイル

「これ……全部ボクのなんだって、自慢したいな……」

ベガ

「人様に見せるようなものじゃありません……
あなたが独り占めするんでしょう……？」

アルタイル

「えへへ……そうだった……
次……腕……行くね……ん、しょ……」

ベガ

「んう……また、おっぱいで挟み込んだりして……
ことごとくエッチです……」

アルタイル

「えへへ……実はさっき、ベッドの上で……
これやりたいなって思ってたんだ……」

アルタイル

「じゃあ、ごしごしするね……ん、しょ……うん、しょ……」

ベガ

「んう……くすぐったい、ですわ……
それに、アル……さっきから、顔が赤い……」

アルタイル

「えへへ……のぼせ、ちゃつたかな……ん、しょ……ん、しょ……」

ベガ

「ちょ、ちょっと……さっきから、ち、乳首ばっかり、当ててません……？
だんだん、硬くなってきてますけど……」

アルタイル

「んつ……う……ご、ごめん……
ちょっと……今、なんか……だめ、かも……はあ……あつ……」

ベガ

「やん……耳元で、えっちな声、出さないで……んつ……
わたしまで、意識……してしまいます……」

アルタイル

「えっちなボク……いや……？」

ベガとお風呂入ってるだけで……シたくなっちゃうんだ……」

ベガ

「嬉しい、ですけど……」

あなたが……疲れちゃわないか、心配で……」

アルタイル

「ボクなら、大丈夫……ふ、んんっ……」

ほら……手、借りるね……ん、ふうつ……」

ベガ

「あっ、何、して……う、あ……指……おまんこの、中に……」

アルタイル

「えへへ、こういうの……壺洗い、って言うらしいよ……」

ベガの指……おまんこで、キレイにして、あげる……」

ベガ

「もう……自分が気持ちよくなりたい、だけでしょう……？」

アルタイル

「あんっ……はあ……えへへ、でも……ベガ……」

指、動かしてくれてる……ふう……んっ、あつ……」

ベガ

「経験がありませんから……」

どんな風に触ってほしいか、教えてください……」

ベガ

「アルがしたいことは、わたしのしたいこと、ですから……」

アルタイル

「うれしい……じゃあ、ね……」

人差し指と、中指を……いっしょに、いれて……」

ベガ

「こう、です……？」

アルタイル

「ふう……んんっ……そ、そう……あつ、そのまま

くいって、軽く……曲げて……」

アルタイル

「おへその方……おまんこの、ざらざらしたとこ……」

なでで、ほしいな……ボク……そこが、好きなんだ……」

ベガ

「そうなんですね。気持ちいいとこ、知れて嬉しいです……痛かったら、言ってください……」

アルタイル

「はあ……あ……すごっ……優しい……

ベガの指……ボクのおまんこ、なでなでしてくれるつ……」

アルタイル

「はああ……あ、んつ……でも、もっと強くして、いいよ……

音、でちゃうくらい……ずぼずぼって……ほじくり、まわして……」

ベガ

「でも……」

アルタイル

「ベガになら……うんと、ヒドくされても、嬉しい……」

ベガ

「……っ！

ど、どうなっても、知りませんからね……」

アルタイル

「はああつ、あつ……そ、それつ、すごくいいよつ、

ベガ、上手……ボクの気持ちいいとこ、いっぱい擦られてるつ……！」

アルタイル

「はあ……あ、あうつ……指、気持ちいいつ……ベガの指……

魔法みたい……腰、動いちゃう……んんん、あつ……」

ベガ

「いいですよ、好きにして。

あなたが満足するまで、付き合いますから」

アルタイル

「ほんとおつ、えへ、えへへつ……じゃあ、もっと激しく、動いちゃうつ……

はああ……あ、あつ……んんつ、あうつ……」

アルタイル

「あ……ヤバ、いかも……ピリピリ、くるつ……

あ、う……イ、きそ……これ、きちゃう……ねえ、イっちゃいそうだよつ……」

ベガ

「イってください……わたしの指で……

うんと、かき回してあげます……んんつ、また……中、キつくなつて……」

アルタイル

「んううつ……身体、勝手に反応しちゃって……ふ、うう……
もう、自分じゃ……どうにも……ん、んううつ……！」

アルタイル
「はうううううううううううう……！！」

アルタイル
「は……ひ……はああ……はっ……はっ……
また……イカされ、ちゃった……」

ベガ
「き、気持ちよかったです？」

アルタイル
「うん、うん……！ もちろん、だよ……
ボク……ますますキミに、メロメロになっちゃったよっ」

ベガ
「きやっ！」

アルタイル
「お礼……今度はボクの番っ」

ベガ
「あ、待って……わたしは、もう……さっきので十分っ……ひやっ！」

アルタイル
「男の子みたいに、腰の上、乗って……
ベガのクリトリス……気持ちよくしてあげる、ね……」

ベガ
「はうう……べ、別に……頼んで、ませんけど……ひあああつ、
あ……ふ、んんんつ、あ……す、ごつ……んつ……」

アルタイル
「えへへ……でも、ベガのクリ……もう、
硬くなってる……勃起してるみたいに、なってるよ……」

ベガ
「ひやあつ……恥ずかしい事、言わないでくださいっ……
わたし……そこまで、はしたなくなった覚えはっ……はああつ……！」

アルタイル
「気にしなくていいのに。ボクは大人なベガも、えっちなベガも大好きだよっ」

ベガ
「ほんと……ホント、ですかあ？」

アルタイル

「うん……だから、いっぱい気持ちよくなっちゃえ」

ベガ

「はあああつ、あつ、あつ……はううんつ、
クリ、気持ちいい、気持ちいいですうつ、アルにされるの、全部好きいつ」

ベガ

「あ、あうつ、もっと、強くして大丈夫つ……
自分でするとき、ぎゅって、強くしてます、からあ……はあ、あつ」

アルタイル

「やっぱり？」

ベガのクリ、ちょっと大きいよねつ。いっぱい自分でシた証拠だ」

ベガ

「はあああ、いわ、ないでええつ……その通り、ですけどおつ……
クリオナ、好きなんですつ、だから今、とっても幸せつ……」

ベガ

「ああ、あつ……ふ、んんんつ……
下半身が、自分じゃない、みたい……ふわふわ、してきて……はあつ」

アルタイル

「分かるよ、触られてると、なんか全部、幸せになっちゃうよねつ。
膝でクリ、ぐりぐりって、してあげるつ……」

ベガ

「ああああつ、強、あ、あうつ……机の角で、グリグリするのと、
全然、違いますつ……はああ、あつ、あううつ」

ベガ

「なんで……全部、分かっちゃうんですかつ。
嬉しい、嬉しい……嬉しいですうつ、してほしいこと、してもらえるのつ……」

ベガ

「あううつ、も……わたし、もう、だめ、ですうつ……
来るつ……きちゃ、うつ……はああ……あ、あつ……んんんつ」

アルタイル

「イッていいよつ、ボクにだけ
世界一可愛いイキ顔、見せてほしいな」

ベガ

「うんつ……見せる、見せますうつ、
アルだけに……わたしの、宇宙一、恥ずかしい、とこ……はあああつ」

ベガ

「イ、く……イク、イクつ、いっちゃ……あ、あっあつあつ」

ベガ

「いつぐ……うう……あ、あああああああああ……！！！」

ベガ

「あ……ひ……は……はっ……はあ……はあ……」

ベガ

「も……げん、かい……です……」

アルタイル

「だ、だね……なんか、くらくらしてきちゃったよ……」

ベガ

「あたり、まえです……

お風呂でこんな……激しくしたら……のぼせるに、きまっています……」

アルタイル

「イヤだったかい……？」

ベガ

「いいえ……最高、でしたよ……」

アルタイル

「えへへ……だと思った……」

ベガ

「でも……しばらくは……動けそうに、ありませんね……」

アルタイル

「うん……もうちょっと、ごろんってしてよっか……」

アルタイル

「……へっくちゅんっ」

ベガ

「もう、子供なんだから。

ん……ほら、シャワーで洗い流したら、お湯で洗い流しますよ」

アルタイル

「えー、動けないんじゃなかったの？」

ベガ

「ふふ、いいから」

アルタイル

「はーい」

トラック4「一つになって……」

位置:正面5

ベガ

「……ふう。いいお湯でしたね」

アルタイル

「うん、ベガの可愛いとこも見れたしつ」

ベガ

「もう……さっきからそろはっかりですね」

アルタイル

「だってだってー」

ベガ

「気持ちは分りますけど、いったん休憩にしましょう?

ほら、お部屋のお掃除もしないとですし」

アルタイル

「それもそつか……あ、そうだつ」

アルタイル

「じゃーん、飴つ

休憩するなら、これ食べよっ」

ベガ

「あら、用意がいいんですね。

あなたにしては珍しい……」

アルタイル

「えへへ、そりやもう3年越したもの。

ボクだって色々計画くらい立てるさ」

アルタイル

「それよりほら、食べてみて?

すっごい美味しいんだよ」

ベガ

「それにしても……とっても不思議な色彩をしてますわね」

アルタイル

「ふふっ、まあまあ……いいからいいから。はい、あーんしてあげる」

ベガ

「じゃあ、遠慮なく……あむ……」

位置:アルタイル、左②

位置:ベガ、右④

ベガ

「はむ……んちゅ……ん、ふ……れろ、れろ……れろお……」

ベガ

「ん……個性的な……味ですね……」

ベガ

「ちゅつ……ちゅう、ちゅう……ちゅう、れろ、れろ……」

ベガ

「……でも、おいひいれふ……
くせになる味……ん……ちゅ……」

ベガ

「んちゅ、れろ……んちゅう、ちゅう、れろ、れろ、ちゅう、んちゅう……」

ベガ

「ん、う……ふ……あ、あれ……
何、かしら……体の芯が、急に、熱く……ねえ、これ、本当に飴？」

アルタイル

「うん、飴だよっ！」

ベガ

「あなたの、ことだから……また、何か……おかしな、ものを……
んちゅ……ちゅう……はむ、れろ……」

ベガ

「んんんんっ……やっぱり、これ……おかしい、です……
さっきから……火照りが……疼きが、止まりません……」

ベガ

「それに……初めから、気になってたんです……この飴……
棒状で……卑猥な、形……して……あつ……」

アルタイル

「えへへ、分かる？
この飴、実はすごい強力な媚薬が入ってるんだ」

ベガ

「やっぱり……もう、お返しですっ」

アルタイル

「んひやっ……ふう、ん……んちゅ……れろ……
えへへ……ベガの唾液の味、する……甘いのと混じって、おいひい……」

アルタイル

「ちゅつ、ちゅう、ちゅう、ちゅう、れろ……んちゅう、ちゅう、ちゅう……」

アルタイル

「なんか……ベガのおちんちん、なめてるみたい……

変な、感じ……はむ、ちゅうう……れろ、れろお……はむつ……」

ベガ

「わ、わたしにそんなものは生えてませんっ」

アルタイル

「えへへ……それくらい、好きな味ってこと……

ちゅう……んちゅ、ちゅるつ……はむ……ちゅううう……」

ベガ

「変なこと言うお口は、こうして……ふさいじやいますよ」

アルタイル

「んぐ……んんつ、それ……いい、かも……

ベガの飴……フェラしちゃうね……んちゅ……ちゅうううう……ちゅるる……」

アルタイル

「んちゅ、んちゅ、れろ、れろ、れろ、んちゅう

……んちゅう、れろ、ちゅう、ちゅう……」

アルタイル

「んん……くひのなかへ、いっぱい、とけてりゅ……」

アルタイル

「れろ、ちゅう、ちゅう、れろ、れろ、ちゅう……んちゅう……」

アルタイル

「ん、ぷは……このままじゃ、とけて、なくなっちゃう……ベガのために、

買ったのに……」

アルタイル

「えっちな飴……お口の中で、どろどろになって……ごっくんしちゃいそう……」

アルタイル

「ん……んじゅるつ、んじゅつ、んじゅつ……」

アルタイル

「んじゅつ、んじゅつ、んじゅつ、んじゅつ、んじゅつ……んじゅつ、んじゅつ、んじゅつ、んじゅつ、んじゅつ、んじゅつ、んじゅつ……つ」

ベガ

「も、もう……なんてエッチに舐めるんですか……」

はあ……あ……わたし、まで……なんだか……んつ……」

ベガ

「ね、ねえ……一緒に、なめてもいいですか……？」

アルタイル

「うん、もひろん……いつしょに、かたくておっきいあめ……
ぺろぺろ、しちゃお……？」

ベガ

「はむ……ちゅ……ちゅうう……ちゅるる……」

アルタイル

「れろ……れろ……はむ……ボクは、下の方、なめるから……」

ベガ

「ええ、わたしが……先端の、方を、くわえて……はむつ、

んじゅ……んじゅ、じゅる……じゅる……」

アルタイル

「れろ、れろお……れろ……んちゅ、ちゅうううう……」

ベガ

「じゅぱ……っ、じゅぱっ、じゅぱっ、じゅぱっ、じゅぱっ、じゅぱっ、
ん、ふ……ああん、溶けてなくなっちゃう……ん、じゅふ、じゅふっ……」

アルタイル

「んじゅるっ、んぐっ、んぐっ、んちゅ……
もっと、なめてたいのに……」

ベガ

「じゅる、んじゅ、じゅるるる、じゅぼ、じゅぼ、じゅぼ、じゅぼ……」

アルタイル

「んじゅるっ……れろ、れろ……ちゅううう、ちゅ、ちゅうつ、れろ、れろお……」

ベガ

「あ……とけちゃい、ました……」

アルタイル

「大丈夫……おくち、あけて……？」

(同時)

ベガ

「んちゅ……ちゅうう……ん、れろ、れろ……」

アルタイル

「んちゅ……ちゅうう……ん、れろ、れろ……」

アルタイル

「ふは……えへへ、最後のおすそわけ」

アルタイル

「どう……媚薬入りの飴、気に入ってくれたかな？」

ベガ

「ふふつ……とっても……
まんまとしてやられてしまいましたね……」

ベガ

「これじゃ、お掃除どころじゃありませんよ……」

アルタイル

「ねえねえ、じゃあ……具合わせっていうの、やりたいんだけど……」

アルタイル

「女の子同士で……おまんこ、こすり合わせるの」

ベガ

「それ……ほんとに、セ、セックス……みたいですね」

アルタイル

「そうだよ……女の子同士でしかできない、優しくて、甘くて……
とろとろなセックスだよ……？ ね、いいよね？」

ベガ

「わたしが断るとでも？
ふふ……リード、してくれるんでしょう？」

アルタイル

「えへへ、じゃあ、足……開いて」

ベガ

「ん……う、あんまり、マジマジ見ないでくださいます？」

アルタイル

「ううん、見る……だって、すっごいキレイでエッチだから……」

アルタイル

「ベガのおまんこ……ボクので、もっと、気持ちよくして、あげるね……」

ベガ

「はう……んんっ、あなたの……もう、濡れてる……」

アルタイル

「ベガのだって……もう、ぐちゅぐちゅ……

どっちのか、分からぬよ……じゃあ、動くね……？」

ベガ

「はう……んつ、んんんつ、あつ……
つな、がってる……アルの……お、おまんこと……」

アルタイル

「うん……ベガの、とろとろ……熱いの……
伝わって、くるつ……はあ……あつ……」

ベガ

「わたしも……うごいて、いいですかっ……
はあ……あ、アルにも、きもちよくなつて、ほしいから……」

アルタイル

「うんつ……いっしょに、したら……
何倍も、気持ちよくなつちやうよつ……」

ベガ

「はあああつ、あつ……あうつ、わたしの……
お豆……クリ、デカクリが……アルのに、ひつかかって……あああんつ」

アルタイル

「あううつ、ベガがそんなえっちな言葉言うの、反則うつ……
耳に響く……ああつ、なんか……えっちいよおつ……」

ベガ

「飴の、せいでしょうかっ……なんだか、歯止めが……はああつ、
クリ同士、こりこりするの、すごくいいですっ……」

アルタイル

「うんつ、うんつ、ベガの勃起クリ、硬くて気持ちいいっ……
ボクのじや役不足かもだけど……いっぱい、ぐりぐり、しちゃうねつ……」

ベガ

「はああんつ、そんな、ことつ、あなたにされるのが、一番気持ちいいですっ、
わたしはもう……オナニーじゃ、物足りない身体に、されてしましましたあつ……」

アルタイル

「ボクもだよおつ、ずっと、キミとこうしていたいっ、
キミを可愛く鳴かせたいんだつ」

ベガ

「あ……あああつ、やつ、激し、すぎつ、
わたしが……うまく、うごけな……はあああ、あああつ！」

アルタイル

「ごめんね、ごめんねつ、一緒がいいかもだけどつ、

ボクも、抑えられなくてつ、気持ちいいのが、とまんないよおつ」

ベガ

「あううつ、さつきから、ぐちゃぐちゃ、おまんこから……卑猥な、音……
これ、全部……わたしたちから、分泌されてるんですねつ……」

アルタイル

「そうだよおつ、えっちしたくて、おまんこが唾液、垂らしちゃってるのつ」

ベガ

「シーツ、汚れちゃいますっ……はあああつ、
これ以上したら、ボタボタ、垂れちゃう……あ、あああつ」

アルタイル

「そんなのもう、関係ないよつ。
はむ……ちゅ……ちゅううう……ちゅるるるるつ」

ベガ

「あ、待って、その位置……服の上から、見えちゃうつ……
キスマーカ、ダメですうつ……はあ、あああつ……！」

アルタイル

「ダメなんかじゃないでしょつ、だってボクたち、恋人だものつ。
二人はついに結ばれたんだって、皆に教えてあげよつ」

ベガ

「ああ……はあつ……あ、なら……わたしもお……
わたしにも、させて、くださいい……」

アルタイル

「いいよつ……いっぱい、目立つところに……首でも、
胸のとこ、でも……」

ベガ

「なら……はむ、ちゅうう」

アルタイル

「ひやつ……そこ、乳首……あ、ああつ」

ベガ

「ふは……あなたが、私以外の人の前で脱がないようつ……恥ずかしいとこに……
嗜み跡……つけて、しまいます……」

アルタイル

「そんなこと、するわけ……あ、あああつ、んつ、
キミって、嫉妬深いんだねつ……」

ベガ

「知らなかつたんですかっ……？
それにあなた、結構男女問わずモテるみたいですし……」

アルタイル
「知らないよ、君だけを一生、愛してるから……！」

ベガ
「はうううつ、ズルい、ですうつ……
今の、反則……おまんこ、きゅんきゅん……きてるつ、んんつ」

アルタイル
「あううつ、スゴいよ、熱いの、ドロドロ出てきたつ……」

ベガ
「あうう、わたし、もう……無理、限界、ですうつ……
ねえ、一緒に……独りに、しないでくださいっ……」

アルタイル
「分かってる、ずっと、ずっと一緒だからあつ」

ベガ
「イ、く……イク、イ、くつ、
あつ、あつ……ん、んんつ……！」

アルタイル
「ボ、ボクも……はう、来る、来ちゃうつ、あ、ああつ！
あんつ、あつ、あつ、あつ！」

(同時)
ベガ
「はああああああああああああああ……！！」

アルタイル
「あうううううううううううう……！！」

ベガ
「はああああ……あ……はああああ……」

アルタイル
「あううう……んんつ……」

ベガ
「はああ……はっ……はひ……」

アルタイル
「はああ……気持ちよかったですね……ベガ……」

ベガ
「う……あ……」

アルタイル
「ベガ？」

ベガ
「あ……ご、ごめんなさい……
今……意識がちょっと……飛んでた、みたいで……んんつ……」

ベガ
「息……するたび……おなかが……
痙攣……しちゃって……んんつ……あう……」

アルタイル
「……えへへ。
ベガのこと、失神させるくらい、イかせたってことだよね」

ベガ
「……そうみたい、です……
そんなに、うれしいですか？」

アルタイル
「なんか……ベガがそうなっちゃうくらい、
ボクに全部ゆだねてくれたのが、嬉しくて」

ベガ
「ふふ……次はあなたの番ですよ」

アルタイル
「えー？ ボクはどうかな？」

ベガ
「もう……アルったら」

アルタイル
「さすがに、少し疲れたでしょ？
休んでいいよ」

ベガ
「ふふ……勝手なんだから。じゃあ、お言葉に甘えて」

アルタイル
「ちゅ……おやすみ」

トラック5「もっと一つになりましょう……」

ベガ

「ん……う……アル？」

アルタイル

「おはよう、もう大丈夫？」

ベガ

「ええ、おかげさまで……

あれ、部屋がキレイになってますね。あなたが？」

アルタイル

「もちろん、お姫様を起こさないようにそっとねっ」

ベガ

「あらあら、いつから王子様に？」

アルタイル

「初めて出会った時からかな」

ベガ

「ふふ、ずいぶん口が達者な王子様ですね」

ベガ

「……それで、その手に持ってるのは？」

アルタイル

「あ……えっと……バイブかな」

ベガ

「ふ……ふふ、正直ですね。

それでわたしのこと、どうにかしちゃうつもりだったのかしら？」

アルタイル

「えへへ、これ双頭のやつだから、二人とも気持ちよくなれるんだ。

一緒にどうにかなっちゃおうかなって」

アルタイル

「……寝てるキミ見てたら、なんか辛抱ならなくなっちゃって」

ベガ

「ふふ、あんなにしたのに……」

アルタイル

「むしろ……すればするほど、かな」

ベガ

「なら、シャワー浴びてこないとかしら」

アルタイル
「あ、待って。そのままでいいよ」

ベガ
「ちょ、ちょっと……変態っぽいですよ」

アルタイル
「そうなのかも……
キミの身体なら、どんな状態でも、汚くないっていうか……」

アルタイル
「むしろ、全部味わいたい……みたいな？」

ベガ
「……好きにしてください」

アルタイル
「えへへ……足、広げるね。
ん……しょ、まずは……この、アロマオイルを……塗り、塗り……」

ベガ
「あ……やつ、待って、バイブ以外にも、隠し持つてたんですね……
はあつ……あ……」

アルタイル
「うん、せつかくなら色々楽しもうと思って。
……お次は、太ももから、足の付け根まで……塗り、塗り……」

ベガ
「う……あ……は……んんっ、もう……えっち、なんだから……」

アルタイル
「誓め言葉、だと思っておくね……
えへへ……最後は、おまんこに……塗り、塗り……」

ベガ
「はあ……あ……んんんっ……なんです、今度は……
塗ったところが……熱く、火照って……」

アルタイル
「さっきの飴と同じ……これも、媚薬入りのアロマオイル、だって……」

ベガ
「あう……ん、んうつ……ムズムズします……」

アルタイル
「ふー……ふー……」

ベガ

「あんつ、お、おまんこ……ふーふーしちゃ、ダメです……！
んんんつ……ね、ねえ……早く、シてください、よ……」

アルタイル

「ごめんごめん……はむ、ん……じゅうう……」

ベガ

「あああ……き、たあつ……アルの……長い、舌……
はああ……素敵、ですっ……」

アルタイル

「じゅるつ、じゅるつ、じゅるつ、じゅるじゅる、じゅつ、じゅぷつ、じゅる、じゅるつ……」

ベガ

「もう……すっかり、気持ちいいとこ、覚え込んで……
わたしなんかよりも……わたしのこと、よく知っていますうつ……」

アルタイル

「んじゅる……じゅぷつ、じゅぷつ……んじゅつ、んじゅつ、んじゅうううう……」

アルタイル

「じゃあ、こういうのはどう？ 指に……オイル、からめて……」

ベガ

「んひやつ、ま、まって……そつちは、お尻の穴……
指なんか、入れちゃ……ん、んううつ」

アルタイル

「ベガに汚いとこなんてないって言ったよね。
これからも、いっぱい気持ちいいことお勉強しうね」

ベガ

「はああつ、あ……おまんこと、お尻……両方、なんてえつ……
あ、あうつ……はあ……！」

アルタイル

「じゅつうう……んじゅるつ、じゅるつ、じゅぷつ、じゅつ、じゅう、じゅるるつじゅつ、じゅるる……」

ベガ

「う……あ、あうつ、お尻のなか、ほじほじ、だめえつ……
はあ……引き抜くとき、変な、感じ……あ、ああああつ……！！」

アルタイル

「んつ、ちゅつ、ちゅう…じゅるつ、じゅううううううつ。
んじゅう……んじゅう、んじゅるるるるつつ」

ベガ

「あうう……も、だめ……おしりと、おまんこ、きもちいい……あ、ああつ、やだ……こんな……こんな、変態なのっ……」

アルタイル

「れろっ、んっ、れろ、れろ、れろお……ちゅるつ、ちゅうう…
んちゅつ、ちゅつ、じゅうう、じゅる……」

ベガ

「くやしいけど……アルの触ってくるところ、
全部……気持ちいいですうつ……お尻、お尻の中、熱いいつ……」

アルタイル

「あ、お尻の穴、きゅってなった……
イきそなんんだ、イって。イっていいよ。ボクが見ててあげる」

アルタイル

「じゅるつ、じゅるつ、じゅるるつ、んじゅつ、じゅうう……」

ベガ

「う……あ、ああつ、い……ク、イク、お尻で、イっちゃ、あつ、
イク、イクいくつ……！」

ベガ

「んんんんんんっ……！！！」

アルタイル

「わっ……お尻、ぎゅってなった……
すっごい、キツキツ……指、かじられちゃったみたい……ん、しょ……」

ベガ

「あ、まって……今、抜かないで……はあ……あ、んぐううつ……！！！」

アルタイル

「抜くときが、一番気持ちいいっていうもんね。
またイっちゃったかい？」

ベガ

「はあああ……はあ……は……はあ……はひ……
あなた、分かっててやったん、ですね……」

アルタイル

「えへへ、つい」

ベガ

「もう……あなたなんか、こうですっ」

アルタイル

「うひやつ！？ まま、待ってっ！

お尻の穴、なめるのは……さすがに……ん、んううつ、舌、入って……んひつ」

ベガ

「気持ちいいことは、全部いつしょに……

あなたのことも、お尻でイかせてあげますから……！」

ベガ

「じゅるる、じゅるう、じゅるじゅるつ……じゅふつ、じゅふつ、じゅるつ、んじゅる……じゅるる……」

アルタイル

「はううつ……あ、ああつ……う、うんち……するとこ、なのにつ……ベガの、舌が……中で……うあ
……なんか、ヤバい、ヤバいよ、これえつ……」

ベガ

「ん……んちゅう……んちゅう、ちゅう、ちゅう、んちゅう……」

ベガ

「お尻だけだと思って……油断しないで、くださいね」

アルタイル

「はうううつ、クリ、きもちつ……お尻、ペロペロされながら……

クリ、いじめられるの……いい、いいよおつ……はああ、あ、あうつ！」

ベガ

「んちゅるる、んちゅる、んちゅる、ちゅう、ちゅう、れろ……」

アルタイル

「ひあああつ、知ってるつ？ お尻のこと、

ケツマンコって、言うんだって……これ、確かにそうかもつ」

アルタイル

「おまんこみたいに、気持ちいいよつ……

両方の穴、ほじほじされたら……バカに、なっちゃううつ！」

ベガ

「なら……もっと、バカにしちゃいます……

あなたばっかり、ズルいですから」

ベガ

「ん……ちゅう、んちゅう、んちゅう、んちゅる、

んちゅる、んちゅる、んちゅる、れろ、れろ……」

アルタイル

「あああん、あつ、あうつ……好き、両方好き、ケツマンコ、すきいっ、もっと、もっとしてえつ！」

ベガ

「んちゅ、れろ、ちゅふっぷつ、んちゅるつ、ちゅふつ……ちゅるつ、れろ、れろ、れろお……」

アルタイル

「こんなはしたない女の子でも、嫌いにならないつ？
ずっと一生、愛してくれるつ？」

ベガ

「あたりまえれふ……ケツマンコで喘いでるアルも、宇宙一可愛いですよ」

アルタイル

「はうううつ、幸せ……すっごく、満たされる……
きゅんきゅん、くるつ……あ、ああつ……あふううつ！」

ベガ

「んじゅつ、ちゅううつ、ちゅるるう……じゅるるる……ちゅぱ……」

アルタイル

「くる……き、ちゃうつ……ボクも……いくつ、イッちや……あ、ああつ！」

ベガ

「大丈夫ですよ。一緒にだから。安心して、気持ちよくなつて」

ベガ

「じゅつ、じゅつ、んじゅる……じゅるつ、じゅううるつ、はあ……んじゅつ、んじゅるつ、じゅる、じゅる
るつ、じゅるじゅるつ……」

アルタイル

「くる……きちや、あつ、あ、あああつ！
あつ……んつ！」

アルタイル

「あはああああああああ……！！！」

ベガ

「ふぐつ……ん、ふはつ……
すごい、ですわ……アルのなか、ヒクついて、激しくうねるみたいに……」

アルタイル

「はああ……は……はああ……
だ、だって……キミが予想以上に、テクニシャンなんだもの……」

ベガ

「まあ。これでも初めてですよ？」

アルタイル

「はあ……あ……ふ……
じゃあ……ボクたち……相性ぴったりってことかな……」

ベガ

「お尻で決めるのもどうかと思いますけど」

アルタイル

「大丈夫だよ。ボクに至っては、
おまんこより先に、お尻の処女失ったみたいなものだからさ」

ベガ

「ふ……ふふ……何それ……」

アルタイル

「ふふふ……えへへ……」

アルタイル

「ね……キスしていい？」

ベガ

「いいんですか？」

アルタイル

「汚いとこなんてないから」

ベガ

「……はい」

(同時)

ベガ

「んちゅ……ちゅうう……ちゅ、ちゅば……」

アルタイル

「んちゅ……ちゅ……ちゅう……ちゅふ……」

(同時)

アルタイル

「ふは……はあ……はあ……」

ベガ

「ふは……はあ……はあ……」

アルタイル

「じゃあ……バイブ……入れる、ね……？」

ベガ

「はい……一緒にタイミングで、お願いします……」

アルタイル

「んっ、んんっ…あっ、くう……んんうつ」

ベガ

「はあ……はあ……大きくて……入れるの、大変、ですね……」

アルタイル

「でも……あと……もうちょっとで……根元まで…んっ、んう…あつ、ん……」

(同時)

ベガ

「はうううううううううう……」

アルタイル

「んんうううううううう……」

アルタイル

「はあ……はあ……だ……大丈夫？ ベガ……」

ベガ

「ん……うう……アルこそ……痛く、ないですか……」

アルタイル

「ううん……思ったより……あ、やっぱ、ちょっとだけ、苦しいけど……けど……」

ベガ

「やっぱり……アルも、ですか……」

アルタイル

「つながってるのが……嬉しいで……」

ベガ

「ええ……本当に……ひとつに、なれたみたいで……」

アルタイル

「動いて……いい……？」

ベガ

「もちろんです……わたしも、一緒に……」

アルタイル

「んっ、ああ……、あつ、ああつ！

ぱんぱんって、打ち付けあうの……すごく、えっちだね……」

ベガ

「はいっ……アルを犯しながら……

犯されてる、みたいで……興奮、してしまいますっ……はああつ」

ベガ

「んっ、んんう……ふあ、あつ、ああつ……あんっ、ああんっ……！」

アルタイル

「あう……ベガのこと、もっと気遣いたいけど……無理、かもおつ……
なんか……自分で、いっぱいいっぺいだよおつ……！」

アルタイル

「んつ、ふあ、あああつ！ んんつ、んんう、あつ、ああ、あああつ！」

ベガ

「わたし、も……あなたを、支えたいけどっ……
気持ちいいのが、頭に響いて……真っ白に、なっちゃいますうつ……！」

アルタイル

「好き、好きだよベガ、大好き、大好きいつ」

ベガ

「好きい…大好きい…アル、大好きですう… ずっと、一緒ですうつ……！」

アルタイル

「当たり前だよっ、世界で一番、大好きだからあつ！」

ベガ

「わたしも、ですうつ、もっとアルのこと、おまんこの奥で感じさせて、くださいっ……！」

アルタイル

「ボクも……ベガのことが、いっぱいほしい……ベガの、全部、滅茶苦茶にしちゃいたいよおつ
……！」

ベガ

「ひやつ！ ふあ、あつ、あんつ！ 急に、激しくするなんてえつ……！」

ベガ

「わたしの……おまんこ、壊れちゃい、ますうつ……はああ、あ、ああつ！」

アルタイル

「ごめんね、なんかもう、イっちゃいそうでっ！ 腰、とまんないのっ！
はああつ、あ、ああつ……あ、あ、ああつ！」

ベガ

「うれしい、わたしも、ですうつ……！
本当に、何から今まで、相性、ぴったりで……幸せ、ものですうつ……！」

ベガ

「あつ、あつ、あつ、あん…！ もう、わたしのおまんこも……
ダメに、なっちゃいますっ……はああ、あつ！」

アルタイル

「イって、一緒にイこう？ んつ、あつ、ああつ、んああ…！」

ベガ

「はいっ……ふたりで、アルと……幸せに……はああ、あつ、ああつ！」

ベガ

「わたしのこと……滅茶苦茶にして、いいからあつ！ ああつ！」

ベガ

「あつ、やつ、やあん！ あ、あ、すごつ！ 深くてつ！ あふつ！

窒息しちゃいそなくらいつ、気持ちいいですうつ！」

アルタイル

「ふあ、あああつ、あ、つく、うう…やあ、ああんつ！」

アルタイル

「ボクも、下半身、びりびりで、わかんないつ！

自分が、なにしてるかつ、あ、ああつ、きもち、きもちいいよおつ！」

アルタイル

「つながってるの、きもちいいつ！

いつしょ、ずっと、いつしょにいつ！」

(同時)

ベガ

「ああつ、あんつ、あつ、ああつ！ イクつ、イクイクつ…！」

アルタイル

「ああつ、あんつ、あつ、ああつ！ くるつ、きちゃうつ…！」

(同時)

ベガ

「イつ、クうううううううううううううううううう！」

アルタイル

「イつ、クうううううううううううううううう！」

ベガ

「はああああ……あ……ふ……んんつ……」

アルタイル

「うあ……あ……あうつ……はああ……」

ベガ

「はああ……はあ……は……」

アルタイル

「はああ……は……ひ……」

アルタイル

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

ベガ

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

ベガ

「……ねえ」

アルタイル

「……なあに？」

ベガ

「愛してます」

アルタイル

「……どうしたの」

ベガ

「この言い方は、まだしてなかった気がして」

アルタイル

「えへ……えへへへ」

アルタイル

「色んな好き、埋めてくれるんだ」

アルタイル

「じゃあボクも……」

アルタイル

「ちゅ……」

ベガ

「ん……キスはさっきからしてるでしょう？」

アルタイル

「これくらいじゃ、ボクの愛は伝わらないよ」

ベガ

「あら、わたしの愛も、こんなものだと思ってますか？」

アルタイル

「ふふ……」

ベガ

「ふふ……」

アルタイル
「……ねえ」

ベガ
「……もう一回、してもいいかしら？」

アルタイル
「え、え……ベガから誘ってくれるの？」

ベガ
「……やっぱり取り消そうかしら」

アルタイル
「だーめ、今夜は、寝かせないぞー、なんて」

ベガ
「あん……もう、エッチなんだから……はああつ……」

トラック6「エピローグ」

アルタイル
「……ふう。ベッドはこんなもんでいいかな？」

ベガ
「散々汚しつくしてしまいましたからね。
……うん、匂いもしませんわ」

アルタイル

「あーあ、これでまた、1年会えないのかあ」

ベガ

「ふふ、わたしたちのような不死の身にとって、
1年なんてあつという間ですよ？」

アルタイル

「それでも、だよ」

アルタイル

「ボクは365日、永遠にキミといたいよ」

ベガ

「それは……わたしもですけど」

アルタイル

「ごめんごめん、困らせちゃった」

アルタイル

「昔はともかく、今は年に一回しか会えないっていう、
そんな星のもとに生まれたことも、恨んでないよ」

ベガ

「そうなの？」

アルタイル

「だって、こうじゃないボクたちって、
ボクたちって言えるのかな」

ベガ

「ふ……ふふ、哲学的なようで、
あなたらしい、感性によった答えだと思います」

アルタイル

「それって……褒めてる？」

ベガ

「ええ。わたしも同意見ですし」

ベガ

「会えない日々が……愛を深くする、なんていいますし」

アルタイル

「あーん、それでもやっぱりさみしいよー！」

ベガ

「……もう、別れがつらくなりますよ？」

アルタイル

「……ごめんごめん」

アルタイル

「そうだね、ボクたちは晴れて結ばれたわけだし」

アルタイル

「最後はいつもらしく、明るく元気よく、さよならしようか」

ベガ

「ええ……では」

アルタイル

「うん……それじゃ」

(同時)

ベガ

「ちゅ……」

アルタイル

「ちゅ……」

(同時)

ベガ

「また来年」

アルタイル

「また来年」

(同時)

ベガ

「愛しています、アル」

アルタイル

「愛してるよ、ベガ」